



# 本田 あふひ

ほんだ あおい

本田あふひ（本名：伊万子）が、俳句を始めたのは大正2（1913）年、37歳のころで、甥の島村元（1893～1923）とともに、高浜虚子に師事したのがきっかけです。

そもそも本田は、謡曲に堪能で、能楽の稽古に打ち込んでいました。「あふひ」という俳号も、鎌倉宮の奉納能にあふひが出演した時に、観覧に来ていた虚子によって命名されたといわれています。

しかし、同11（1922）年に夫が没したこと、本格的に作句にとりかかるようになっていきます。

その後、虚子が主宰していた「ホトトギス」の家庭俳句会や婦人俳句会などの句会を立ち上げ、また、虚子がほぼ毎月1回の割合で開催していた「武藏野探勝」と称する吟行会にも同行し、世話役をするなど、虚子の側近の一人としても俳句の普及にも尽力しました。

昭和7（1932）年8月7日、本田は、高浜虚子、星野立子、鈴木花菫、富安風生、安田蚊杖などの吟行会一行とともに野田を訪ね、醤油工場や清水公園などを巡っています。この時の様子を、同行の山口青邨が「武藏水郷」という紀行文で書いています。

「醸酵工場に行く、こゝには幾百本といふタンクが並んでゐる、一ぱい諸味が入つてゐて、ぶつゝと氣泡を出して醸酵してゐる…（中略）…指の先にちよいとつけて甜めて見る人がある、先生も甜めて御覧になる、あふひ夫人も甜めて見る…みんな甜めて見る、『うまい、うまい』といふ…（中略）…工場を引き上げて、野田の町を通つて、町をづつとはづれた処の清水公園の衆楽園といふ家に行く。折から旧暦の七月八日で、家々には七夕竹が立てゝある、一行は団らざる今日の日に会して、「七夕」「七夕」と言つて喜んだ。」

表題の句で、本田は、七夕飾りが続く、昭和初期の野田の家並みを、非常に素直な視点で描写しています。

「野田市の年中行事」（佐藤真著）には、「東京などでは陽暦七月七日を用いるが野田では月おくれ八月七日に行う…（中略）…五色の短冊を吊し、又真蘿にて作りたる牛と馬とを飾り、児童これを引きて遊ぶ。此風は漸次廃れつゝあり」と記されているように、大正時代既に古い風習が殆ど見られなくなっていたようである」とあります。

本田あふひは、昭和7（1932）年に「ホトトギス」の同人に推薦されるなど、現代の女性俳句隆盛時代の基礎を築いた、明治開化期の女性俳人の一人として、その名を残しました。

## 軒並の七夕竹や野田の町

大正末期	大正11（1922）年	明治34（1913）年	明治28（1895）年	明治8（1875）年
昭和14（1939）年	昭和7（1932）年	大正2（1913）年	大正2（1913）年	大正2（1913）年

12月17日、東京神田駿河台で坊城俊政の四女（9人兄弟の末子）として生まれる  
華族女学校（現在の学習院女子高等科）を卒業  
貴族院議員・本田親清と結婚  
甥の島村元とともに高浜虚子に師事  
本格的に作句を始める  
「ホトトギス」の家庭俳句会・婦人俳句会など、虚子の句会を作る  
野田を訪れる。「ホトトギス」の同人となる  
4月2日没